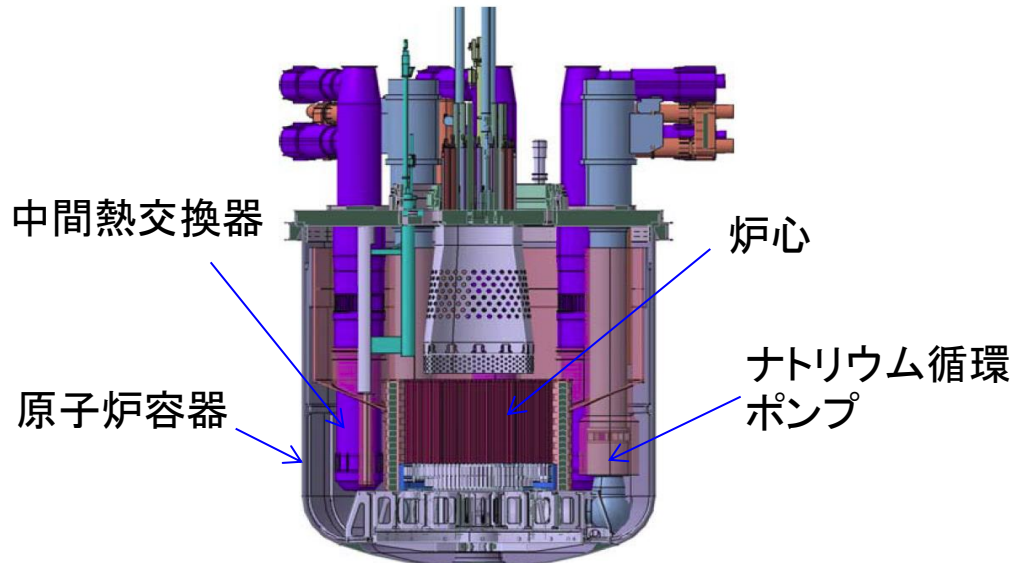


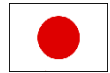
- 大型の「プール型」炉では原子炉容器が大きく、地震条件の厳しい国では、耐震性の観点で不利。
- かつては、コンパクト化された「プール型」の方が経済性に優れるとされ、日本以外の国が「プール型」を志向していた。

- 地震国である我が国は、プール型と比較して耐震性に優れている「ループ型」を選択している。
- 現在、我が国が開発を進めている「ループ型」の先進的な設計では、革新技術の採用により「プール型」に劣らない経済性を有する。

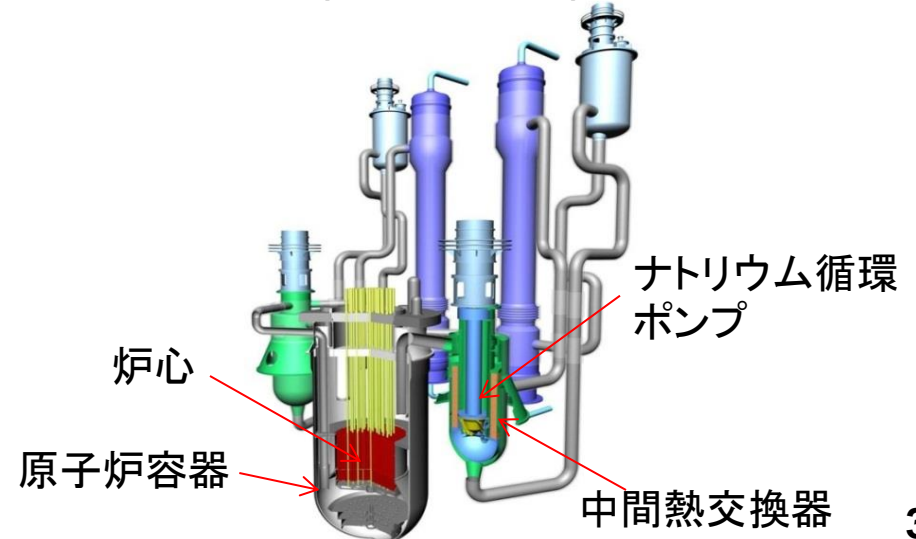
プール型炉 (タンク型炉)



先進ループ型炉



- 炉心を収納した原子炉容器と、ナトリウム循環ポンプ及び中間熱交換器を配管で接続



(参考) 海外諸国が開発を進めている炉型と我が国の炉型 (2/3)

従来技術ではプール型が経済的だったが、ループ型も先進ループ型概念を採用することにより経済性を向上させ、プール型と同レベルの経済性とした。

	プール型	先進ループ型
安全性	<ul style="list-style-type: none"> 安全要求を満たすように設計するため、同等。 ○原子炉容器、ガードベッセルにより1次系Naを2重バウンダリで容易に格納可能。 	<ul style="list-style-type: none"> 安全要求を満たすように設計するため、同等。 ・1次/2次系ともバウンダリ2重化によりNa対策を強化。 ○自然循環時の駆動力を大きく取れる点で有利。
構造健全性	<ul style="list-style-type: none"> △支持荷重が大きいため、<u>耐震性の課題大</u>(欧州の耐震条件には適応可能)。 ○熱容量大のため熱過渡荷重が小。 	<ul style="list-style-type: none"> ○支持荷重が小さいため、<u>耐震性の課題が小</u>。 △熱容量小のため熱過渡荷重が大(設計対応可能)。
保守・補修性	<ul style="list-style-type: none"> △主要機器が原子炉容器内の隔壁構造のため、原子炉容器内部構造の保守・補修は課題が有る(R&Dを重点的に実施中)。 ○中間熱交換器および1次系ポンプは原子炉容器から引抜補修可能で、保守・補修性に優れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○原子炉容器内が簡素で、保守・補修性に優れる。 ○各機器が分散配置(独立性が高い)のため、接近が容易で保守・補修性に優れる。 △中間熱交換器の補修時には、配管の切断が必要(配置対応可能)。
製作・建設性	<ul style="list-style-type: none"> 原子炉容器等を現地組立するため建設工期はやや長い。 △耐震条件が厳しい地域では製作可能な原子炉容器の大きさに限界がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 原子炉容器に信頼性の高いリング鍛造材による工場製作を採用し、現地工事が少ない点で工期もやや有利。 さらに、鋼板コンクリート製格納容器により建設工期を短縮。 △ポンプ組込中間熱交換器等の大型機器は複雑な製作工程が必要(工場製作で対応可能)。
経済性	<ul style="list-style-type: none"> ・1次系機器を集中配置するため建屋を縮小でき、建設コストは従来ループ型よりは安い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>先進ループ型は、2ループ化、ポンプ組込IHXなどによる物量低減により建設コスト削減。</u>

上記の内容に関しては、フランスのCEAやEDFとも既に共有済みの認識である。

ループ型炉技術のプール型炉との共有性

- ループ型炉では1次冷却系の各機器が原子炉容器外に分散配置されているため、プール型炉とは1次系の運転特性やメンテナンスに関する技術が異なる。

- しかし、以下に列記する技術については、プール型炉と共有性のある技術であり、それらに関する「もんじゅ」の成果がプール型炉にも有効に反映できる。
 - ✓ 炉心技術
 - ✓ 2次系の運転特性やメンテナンスに係る技術
 - ✓ ナトリウム取扱技術
 - ✓ 高温構造・材料技術
 - ✓ 燃料取扱技術
 - ✓ 各種計装機器技術
 - ✓ その他ナトリウム冷却高速炉の基本技術（プラント制御特性、安全保護系、システムインターロック等の運転に関する諸情報を含む）